

## 第 36 回(2010. 4. 14 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「酉は鶏」

酉は、古代中国では「糸酉(しゆう)」で、「ちぢむ」という意味があり、植物の実が成熟しきった状態をさす言葉だったというが、この文字を動物の鶏に当てはめて人々に覚えやすいようにしたのだろう。

鳥の先祖は始祖鳥だという。1860 年にドイツで、恐竜の化石がよく発見される「ジュラ紀」という地層(およそ 1 億 5 千万年前)から発見された化石が最初である。最近では、始祖鳥は恐竜が進化したものだという説もあるが、逆に恐竜は始祖鳥から進化したという説もあるようだ。現在、世界で最も小さな鳥は南米のハチドリだが、この鳥は体長 6 センチくらいで、長い嘴で蝶のように花の蜜を吸うことから、このように名付けられた。この鳥は、空中で停止することができる珍しい鳥で、花の蜜や昆虫を主食としている。反対に世界最大の鳥はダチョウである。その中でも「モア」という種類の鳥は、ニュージーランドに生息していた体重が数kgにもなる鳥で、19 世紀に乱獲されて絶滅したといわれているが、最近になって山奥で生息している可能性も出てきたとの報道もあった。

## 黄身がないキミの悪い卵

われわれの食生活に欠かすことができない家鶏は、紀元前 3000 年ころにはインドあたりで飼育されていたといわれている。日本では今から 2000 年ほど前の弥生時代にはすでに飼育されていた形跡がある。今では食用のほかに鳴き声や姿形を鑑賞する鶏、闘鶏用などいろいろあるが、日本各地で十数品種が天然記念物に指定されている。数ある品種の中でも軍鶏(しゃも)、薩摩鶏、河内奴は闘鶏として、東天紅、声良、唐丸は長鳴鳥として有名である。また小国、地鶏、比内鶏、烏骨鶏、ちゃば、尾長鶏などは観賞用としても有名だが、最近では比内鶏の肉や烏骨鶏の卵などはブランド物として食肉店に並んでいる。

現在の一般的な食用鶏は、中国原産のコーチンの改良種や東南アジア原産のブラマーの改良種が主で、身動きできないケージ(鳥かご)で飼育され、ぶくぶく太らされてブロイラーとして出荷されている。ブランド商品が出てきたのは鶏界も例外ではない。「地鶏」などと表記されて、ブロイラーの鶏に比べて格段に高価である。日本三大地鶏は、秋田県の比内地鶏、九州南部の薩摩地鶏、愛知県の名古屋コーチンだといわれている。誰が決めたのか知らない。生産量なのか、味なのか、はてまた値段なのか、何を根拠にして日本三大地鶏と銘打ったのかも知らない。地鶏は JAS 規格で在来種の血液が 50%以上で、平飼い(ケージではなく地面に放し飼いたした鶏)で、1 平方メートルあたり 10 羽以内で 80 日以上飼育したものでなければならないという決まりがあるという。これに当てはまらない鶏は「地養鶏」と表記している。なぜ 50%以上で、なぜ平米あたり 10 羽以内で、なぜ 80 日以上なのか、その根拠もわからない。

卵を生産する鶏は、イタリア原産の白色レグホーンが主流で、この種の鶏は年間 250 ~ 300 個の卵を産む。ちなみに、卵は料理に使うと「玉子」と書くのが一般的である。以前、アフリカのガーナに友人を訪ねたことがあった。夫人が朝食に目玉焼きをこしらえてくれたが、出てきたものを見ると黄身がない。驚いた雲竹齋に、夫人は「私が黄身だけ食べちゃったと思われても嫌だから」といいながら、生卵を持ってきて目の前で割ってくれたが、なんと、透明な白身の上に透明な黄身が乗っていた。つまり、黄身が黄色ではなく無色だったのである。ガーナの首都アクラ市の中央市場で買ってきた卵は、鶏の餌にトウモロコシなどを食べさせていなかったから黄身に色がつかなかったのである。この国ではトウモロコシは大切な人間の食料なのだというから仕方がない。専門家によれば、鶏卵は飼料に含まれるカロチンなどの色素の量によって卵黄の色を増減させるこ

とができるという。無理をすれば青や紫の黄身ができるそうだが、当然青や紫の黄身はキミが悪いから売れないだろう。日本では、ヨード卵とか DHA 卵など出回ったことがある。また、有精卵は栄養があつていい、という人がいるが、学者によると栄養価には無精卵と変わらないのだそうだ。卵は値段が安いので、なんだかんだと付加価値を付けたいのだろうが、あまり栄養を付けすぎると、生活習慣病になったり早く惚けたりするから、程々にして置いて欲しいものだ。

## 常世の長鳴き鳥

鳥と人間の関わりは古くからあり、『日本書紀』には雄略天皇の時代に鬪鷄の記録がある。また、『古事記』には、アマテラスが弟のスサノオの乱暴に怒り、天の岩戸に身を隠すが、闇の世になって困った神々が相談して、朝を告げる長鳴き鳥を集めて鳴かせたとある。「常世の長鳴鳥」というが、それ以来神社に鳥が祀られるようになった。

東京浅草にある鷲神社などの「酉の市」は有名だが、鷲神社の由来はアマテラスがお隠れになった事件で、天の岩戸の前で神々が踊ったり歌ったりした際に、弦という楽器を持ったアメノヒワシノミコト(天日鷲命)を祀ったのが、鷲神社の由来である。また、酉の市は、ヤマトタケル(倭建命/日本武尊)が東方征伐の際に戦勝祈願をし、また凱旋の帰途、社前の松に武具の一種である熊手をかけてお礼参りした故事に由来している。その日が11月の酉の日だったから、酉の市には熊手を売ることになった。

神武天皇の東征という有名な神話のなかに、熊野の山中で1羽の八咫鳥(やたのからす)が飛んできて道案内をしたり、激しい戦いの最中に金色の鷄(とび)が弓の先に止まって輝いたので、敵は目がくらんでしまい逃げ去ったりした話がある。ちなみに、金鷄(きんし)勲章はこの故事に由来する。この勲章は、明治23年(1890)2月11日の紀元節(現在は建国記念日)に制定され、功績のあった軍人に与えられる勲章だった。昭和22年(1947)GHQの命令により廃止されたから、現在は欲しいといっても貰えない。どうしても欲しかったら骨董屋に行けば売っている。正式に授与されたいなら、世界情勢が変わり日本も戦争に巻き込まれて戦うはめになったら復活するかもしれない。しかし、残念なことに、そのころ諸君は骨になって地上から消えているに違いない。八咫鳥は三本足で、熊野大神のお使いである。サッカー日本代表のシンボルマークはこの熊野の八咫鳥である。このマークは、日本に初めて近代サッカーを紹介した中村栄之助氏が熊野の出身だったから、氏に敬意を表して熊野神社の八咫鳥にしたものであるという。

カラスは黒いのが普通だが、白いカラスがいるという人がいる。たしかに、アジア、アフリカの北部に生息するハイロホシカラスは、体に若干白い部分があり、カラスという名前はついていないが、これはカラスと同じスズメ目カラス科であってもハイロホシカラス属だから、いわゆるカラス族ではない。同様に佐賀県の天然記念物になっているカチカラスは白いが、これは鶺鴒(カササギ)であつてカラスではないが紛らわしいことは確かである。雲竹斎は、その昔、上司から「カラスは白い」といわれたら「おっしゃるとおり確かに白いカラスもいますネ」といえなかったため、出世ができなかった。

## 鳥の逆襲

宮内庁では網を空に投げて捕る鴨猟が優雅に行われるが、一般の人は散弾銃を使う。この散弾には鉛が使われていて、池や湖に沈んだ鉛の弾を飲み込んで、鉛害によって死ぬ白鳥や水鳥などが多い。水鳥は消化を助けるために小石を飲み込む習性があるからだが、そのためアメリカなどでは、鉛の弾は禁止されている州も多い。また、人間は鷲鳥を狭い籠に入れて無理やり餌を食べさせて脂肪肝にさせ、「フォアグラだぁ」などといって食べている。最近、都会ではカラスの被害も話題になるが、最近では都会にカラスが大挙押し寄せて人々の脅威となっている。カラスは非常に利口だから、石を投げたりして追い払う人を覚えていて、油断していると鋭いくちばしで攻撃してくる。以前、ヒッチコックの「鳥」という映画があつた。鳥が人間界を襲う話である。まさに映画を地でいっている。鳥インフルエンザウイルスによる被害も目立っている。いま、鳥たちの逆襲が始まった

のだ。